

2021年6月27日

大井バプテスト教会

説教題 『これらの小さな者』とは？』 マタイ18章10～14節

主任牧師 加藤 誠

「これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい」「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」(マタイ18章10、14節)。

6月23日は76年前の沖縄戦で日米両軍の組織的戦闘が終わった日です。わずか三か月の戦闘で20万人以上（県民の四人に一人）が犠牲になった沖縄戦の悲惨を決して忘れない、二度と同じ悲劇を繰り返させてはいけない…という深い決意と平和の祈りが毎年重ねられている日です。その23日に先立つ先週20日（日）夜、沖縄バプテスト連盟主催の合同平和礼拝「沖縄、ちむぐりさぬ日を覚えて」が行われました。「ちむぐりさ」とは沖縄の言葉で「肝苦りさ」。直訳すれば「はらわたが痛む」という意味です。「あなたが痛むからわたしも痛む、あなたが悲しいとわたしも悲しい」という、誰かの痛みとの共振共苦をあらわす沖縄独特の言葉です。

今月は「Fixed on Jesus」というテーマで、「私たちの目を主イエスにしっかり向けていこう」というメッセージを聖書から聴いています。「Fixed on Jesus」とは何よりもまず主イエスの「愛」にしっかりつながり、離れないでいようということですが、同時に主イエスが何に心を痛めて、悲しみ、どんな祈りを祈っておられたか。その主イエスの心につながることであります。

主イエスは出会う一人ひとりの悲しみ、苦しみをけして素通りすることなく、ご自分のものとして一緒に悲しみ、苦しみました。その意味ではまさに沖縄の人々の「ちむぐりさ」を二千年前のユダヤで実際に生きられた方でした。

今朝、ご一緒に読んだマタイ18章には「これらの小さな者を一人も軽んじないように気をつけなさい」とか、「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」というように、「これらの小さな者」に対する主イエスの深い関心が繰り返し示されている箇所です。この「これらの小さな者」とは誰のことなのでしょう。伝統的解釈では「これらの小さな者」とは「信仰の弱い者」、「いろいろな困難の中で信仰を失い、祈ること、賛美することが出来なくなり、神さまから離れてしまった者」を指すとされてきました。ただそのように「信仰の弱い一人のことを主イエスは群れから迷い出た一匹の羊としてどこまでも探し求めてくださる方だ」という説明がなされてきたのです。

けれども今回、10節以降の「迷い出た羊のたとえ」の直前に置かれている「罪への誘惑」(6～9節)の部分と一緒に読んでいくうちに、その解釈で良いのだろうか？何か少し違うのではないか？…という素朴な疑問が生まれました。6節以降には「小さな者をつまずかせる者」に対する激しい主イエスの憤りが示されています。この火を噴くような主イエスの言葉が「羊のたとえ」の前に語られているのでしょうか。シンプルに受け取るなら主イエスはここで「つまずいて信仰を失い、迷い出

た者」を「困った問題ある存在」と見なすよりも、むしろその人がつまずき、信仰を失うに至った「事情」を、その人の立場になって受け止めておられるということ。たとえば「見えない神に祈ることは何と空しいことか」と思うようになった人がいたとしましょう。その人に「そんな信仰の弱いことでどうする?」、「そういう時こそ祈りなさい!」と叱咤激励するよりも、「あなたが祈ることなんて空しいと思うようになった気持ちはよくわかる。この世界には『神を信じるなんて空しい!』と叫ばざるを得ないような『つまずき』があふれている。『つまずき』は避けられない。その上に悲しく残念なことには、あなたの信仰をつまずかせる人が教会の外だけでなく、教会の内にもいたりする。でもね、そのつまずきをもたらす人のことも(!)、神はどこまでも愛しておられて、何とかして救いに招き入れたいと祈っておられるのだ。だから、あなたももう一度、神さまの愛のもとに戻って、この世界が少しでも神さまの愛に向かって近づいていけるように一緒に働きを合わせていかないか?」と、神を信じる力を失ってしまった一人ひとりの傍らに座り、その悲しみや失望と一緒に受け止めながら、その人が再び神さまへの信仰を取り戻していくことができるようにと祈り続けておられる主イエスの姿が、ここに示されているのではないかと思うようになったのです。

今もこの世界には、神さまへの信仰を失わせるような「つまずき」に満ちています。新聞を読んだだけでも、神さまの愛と正義を求めてやまない切実な叫びがたくさん響いています。しかもそれらの多くの叫びはなかなか届かないのです。現実はいつまでたっても変わらないのです。沖縄では今日も「せめて保育園や小学校の上だけは軍用機が飛ばないようにしてほしい」と切実な申し入れが冷たく拒否され続けています。「辺野古のきれいな海を戦争のための基地にしてほしくない」という沖縄戦から続く切実な声が無視され続けています。ミャンマーでは、国軍に少しでも非協力的な言動をすればすぐに拘束されて、翌日には遺体で発見される不正義と不条理な現実が毎日起こっていると聞きます。その他にも飢餓や紛争、児童労働、環境汚染などなど。それらの「つまずき」をつくりだしているのは誰なのでしょう。米軍や防衛庁なのでしょう。ミャンマーの国軍なのでしょう。その現実を目をつぶり、何もしようとしない、自分に関係がなければ知らぬふりを決め込む、そういう私たちは「つまずき」を与えていないと言えるのでしょうか。もし主イエスが今の私たちの世界をご覧になったら、今朝のマタイ 18章6節以降の厳しい非難の言葉を誰に向けられるのでしょうか。私には関係のない、主イエスの言葉だと言えるのでしょうか。

主イエスは今日も、この世界の中で神に失望し、世界に失望し、教会に失望している「小さな一人」をどこまでも追い求めて探し出されている方です。その痛みと悲しみに満ちた心に寄り添い、それでもなお「神さまに心を向けて一緒に歩んでいこう」と励まし続けてくださっている方です。この主イエスの心に私たちもしっかりとつなげられていきたいのです。